パートナー情報誌

香　澄

第 14 号
発行日：2010 年 3 月 31 日
発行人：パートナー情報誌『香澄』編集部会
編集員：浅野明宏、有吉潔、稲葉寛、尾形孝彦、
栗原知彦、中村利夫、平江俊之、安川敏行、
深澤幸義、軽部達夫、中原清人

「霞ヶ浦グラウンドワーク」について

「自然再生法」に基づいて国土交通省が「霞ヶ浦田村・沖宿・戸崎地区自然再生協議会」を発足させたのが平成 16 年。12 回の協議会を開催し、議論を重ねた結果、ようやく平成 18 年 11 月に「田村Ａ区間」（全体ではＡ～Ｉの９区間）の実施計画が策定されました。

この間の経緯は、霞ヶ浦河川事務所のＨＰに各回の議事録が掲載されているので一読を薦めますが、細かい議論はさておき、２つの議論に集約できます。一つは、現在の霞ヶ浦の形態（水がめ化による水位の維持）での水辺の自然再生はナンセンス、という議論。二つ目は、「自然再生」の「自然とはどのような状態か」（手を入れながら作っていくのか、放置して自然のままにしておくのか）という議論です。

一つ目の議論は説得力があります（水がめ化が水質の悪化や水辺環境の破壊の最大の要因であることは皆知っている）が、霞ヶ浦のこれまでの歴史や霞ヶ浦によって成り立っているさまざまな産業・生活を考えた時、その蓄積をチャラにすることのエネルギーの膨大さの前に、不毛の議論となってしまうことは目に見えている。霞ヶ浦に係る各層の利害関係を前提に、言い換えれば、今の状況を与条件としてどう再生を果たしていくのか、という方向に向かわざるを得ず、協議会の座長として各議論を一方向に落とし込んでいった前田センター長の努力は並々ならぬものがあったに違いありません。

二つ目の議論は、人の手の掛け方で、この地域をどう利活用するかによってイメージは人それぞれです。霞ヶ浦環境学習という役割を担う当センターとしては、児童生徒のアクセスの容易性・安全性、観察対象の明確化などから、観察路・人工池の整備やサインの設置など、どちらかというとかなりの造作の手を入れる方向で考えざるを得ません。この議論は、多分今後も紆余曲折はあると思いますが、いずれにしても、田村Ａ地区約２ヘクタールの具体的な作業が一昨年から着手され、その実行部隊として「霞ヶ浦グラウンドワーク」という人の集まりができたわけです。

これまで、夏・秋の雑草の刈払いや水生植物観察池の掘削などで汗をかいてきましたが、私としては当初、センター長の手前、「義理」で始まったというのが正直なところです。しかし、参加してくれた方々の霞ヶ浦への思い入れやボランティアで働く姿を見、また間近に霞ヶ浦を眺めることにより段々「好き」になってきたというのが事実です。「好き」というより、霞ヶ浦という湖の大変さへの同情かも知れません。

「アサザの池」「オニバスの池」「フナの乗っ込みが見られる水路」「ミソハギのお花畑」「ヨシ原の迷路」などなど夢に描いていますが、果たして実現するか、途中で挫折し、これまでの苦労が徒労に終わってしまうのではないかという不安があることも確かです。

グラウンドワーカーたち

でも徒労に終わったとしてもいい。環境保全とか地域活動という行為は、これまでも徒労の積み重ねだったと思うからです。「好きになった女だから、なんとかしてやっぺ」というような気分で、気長に付き合っていこうと考えています。

「霞ヶ浦グラウンドワーク」も、まだ「好き者」の集まり。課題は地域の人たちや県内の多くの環境保全団体の人たちの関心をいかに集めるかです。それには、構想に描いているような、魅力を持った地域に、この「田村Ａ地区」を仕上げていくことだと思います。

それがひいては、霞ヶ浦に関心を持ち、愛してくれる「霞ヶ浦マインド」を心に秘めた人たちを増やすことにつながると信じて。

（霞ヶ浦環境科学センター副センター長　井上　操（「霞ヶ浦グラウンドワーク」総務幹事））

センター開設５周年記念「霞ヶ浦水環境フォーラム」を終えて～センター運営第２期の事業展開を展望する～

去る３月１３日（土）に，センター開設５周年記念「霞ヶ浦水環境フォーラム～霞ヶ浦の環境学習の未来を考える～」を開催しました。小学生などの若い世代を十分に取り込めなかったなどの反省点もあるものの，催事当日は天候にも恵まれ，当初目標として掲げていた１，０００人を超える１，１００人の来場者を得ることができました。

今回の催事企画にあたっては，約半数の出展に新しい内容を盛り込むとともに，**センター運営「第２期」**ともいえる今後の５年間の事業展開につなげるための仕掛けを随所に散りばめました。その主な内容は以下のとおりですが，これらの発想を柔軟に組み合わせることで様々な事業展開の可能性を思い描くことができるのでは

パートナー活動PR・霞ヶ浦環境フォトコンテスト

霞ヶ浦の環境学習を考える集い

① 初めて霞ヶ浦流域の１９０の市民団体に対して環境学習ワークショップへの出展を募集し，初参加の４団体を含む６団体に出展してもらえた。
② 「しいたけ・なめこ植菌体験教室」で使用したクヌギの木は，（社）霞ヶ浦市民協会の「どんぐり山（かすみがうら市加茂）」で市民協会員とセンター職員が共同で間伐を行った際に切り出した間伐材を活用した。
③ 初めてパートナー活動を外部へ向けてＰＲするコーナーを設置した。
④ パートナー活動ＰＲコーナーの向かいに，土浦市宍塚で精力的に自然保全活動に取り組んでいるNPO宍塚の自然と歴史の会の出展を配置するなどの工夫を凝らし，パートナーと他団体関係者との交流促進を図った。
⑤ 「霞ヶ浦の水を調べてみよう」などの環境学習型の出展への２階研究室職員の協力をお願いした。
⑥ 霞ヶ浦流域の４河川に設置されている巴川・桜川・恋瀬川・小野川探検隊の意見交換会をはじめて企画するとともに，センター交流サロン・霞ヶ浦問題協議会による４探検隊活動サポート体制について検討した。

すでに周知のとおり，この数年間に渡ってセンター事業予算は大幅に削減されてきましたが，今年度の「こども環境フェスティバル」及び「霞ヶ浦水環境フォーラム」をセンター直営で開催した経験を通じて，少ない予算額であっても，センター所有の機材を活用したり（**既存品の活用**），パートナーや市民団体との協働を進めていく（**横のつながりの活用**）ことで，今後も継続して大型・環境保全啓発イベントを開催していく目途が立ったように思います。

そしてまた，この**「２つの活用」**を強く意識しながら事業を展開していくことが，とりもなおさずセンターが担っていくべき「市民活動との連携・支援」機能を推進していくことにもつながっていくのではないでしょうか。（センター　中原）

イベント・記録グループ（H21 下期活動報告）

※作品に記載された票数は各賞区分ごとの得票数です。

H21 下期におけるイベント・記録グループのセンター事業補助活動としては、延べ１４名が霞ヶ浦入門講座・自然観察会・野外講座（計７回開催）の補助スタッフとして活動しました。他方、自主活動では、センター主催で開催された「霞ヶ浦水環境フォーラム」の１プログラムとして「霞ヶ浦環境フォトコンテスト」を実施しました。

今年度のフォトコンテストには３５作品の応募があり、「霞ヶ浦水環境フォーラム」では、これらの作品をセンター１階「みんなの学び舎」に展示して、来場者に「輝け！霞ヶ浦」というテーマにふさわしい写真に投票していただきました。その結果、１１７名もの来場者から投票をしていただくことができ、集計の結果、右記の方が入賞しました。また、投票用紙に付けたアンケートにも２４名から回答をいただきました。以下にその代表的なものを紹介します。

① やはり自然は美しい。生き物が安心して共生できる環境をとらえているのがいいですね。
② 美しい自然と、きれいな水質を保全出来るよう、私たちも協力・啓発していきたいですね。

その他会場で聞かれた意見を合わせてみても、写真を通じて「輝け！霞ヶ浦」をアピールしたことで、多くの方々に霞ヶ浦の美しさ、自然との共生の大切さを感じていただくことができたものと思います。好評だった霞ヶ浦環境フォトは引き続き「みんなの学び舎」に展示しています。（ｲﾍﾞﾝﾄ・記録ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ　栗原）

（最優秀賞）平江俊之さん，４３票

（優秀賞）栗原知彦さん，３１票

（優秀賞）平江俊之さん，２７票

（アイデア賞）渡邊昇さん，３１票

（ユーモア賞）目次隆さん，３８票

植物グループ（平成 21 年度冬季）

冬季（12 月～2 月）に於けるセンター主催の「野外講座」は、鹿嶋市で「鹿島神宮の森と植物・堀割川の歴史」（12 月）、土浦市（旧新治村）小野の東城寺山域と<小町の里>で「里山の植物観察と周辺の歴史民族の講話」（22 年 1 月）が実施され、2 回で延べ 14 名のパートナーが運営補助活動に参加しました。

次に「定点観察」活動では、冬将軍の来襲とともに年間観察対象であるヨシ、オギ、シロネ、イシミカワ、アレチウリ、サクラタデなど大方の植物は、地上の茎・葉を枯らし、“冬越し”をする様子を記録しました。

そんな中で、春の七草であるコオニタビラコ（仏座）、ナズナ（ペンペン草）やウラジロチチコグサ、メマツヨイグサ、オオアレチノギク、スイバ、ハルジオン、セイヨウタンポポなどがロゼット葉（根もとで地面すれすれに放射状に広がった葉：互いに重ならないようにして伸びた多くの葉が、太陽光で温められた地面の熱を効率よく利用し、かつたっぷり光を吸収して光合成を促進し、貯め込んだエネルギーを使い早春には茎を一気に伸ばして花を開く。）という冬の環境に合わせた生活型でたくましく生きる姿をも観察しました。温かい堤防南斜面ではオオイヌノフグリやホトケノザが、この時期には数少ない可憐な花を咲かせていました。

また、つる性木本であるスイカズラの縁が裏側に丸く巻いた形の越冬葉が見られ、アカメヤナギやエノキなどの落葉樹が冬芽で春を待っており、Ｆ区ではオニグルミの冬芽と羊の顔の葉痕が見る者の目を楽しませてくれました。

（植物グループリーダー　有吉）

オニグルミの冬芽と葉痕

ナズナのロゼット

メマツヨイグサのロゼット

スイバのロゼット

オオイヌノフグリの花

魚グループ　自然観察会

霞ケ浦ワカサギ人工ふ化

霞ケ浦のワカサギ減少に歯止めをかけようと、今年もワカサギの人工ふ化作業が始まった。

霞ケ浦のワカサギ資源を守るため 1982 年から毎年 2 月に実施され、霞ケ浦漁連加盟の漁協が参加して取組んでいる。

2 月 6 日は土浦第一など 6 漁協が人工ふ化の作業に当たった。土浦市手野町の霞ケ浦手野船だまりでは、早朝から土浦第一漁協の組合員 10 人が、定置で捕獲したワカサギから、卵と精子を搾り出し受精卵をシュロ皮のふ化枠に付着させる作業をてきぱきとこなしていた。

ふ化枠は霞ケ浦の水中に沈められ 4 週間ほどでふ化するという。今年の採取目標は昨年の 10 億粒から 8 億粒に減らしたという。

瀬古沢登組合長は「風の影響もあるが昨年は何十年ぶりかで大量のワカサギが捕獲できた。ワカサギが少しでも増えてくれれば」と話していた。

（ パートナー 中村 利夫 ）

図書グループ

図書グループの自主活動のうち、今回は当グループのコア活動の一つである「新聞切り抜き資料の作成」について、ご紹介します。

この作業は、図書グループの自主活動で、作業希望メンバーが各自テーマを選んで実施しています。

テーマの大枠は「環境問題」ですが、具体的には次のようなキーワードで記事をクリッピングしています。

（1）水質関係（内田）
（2）CO2 と水質（尾嶋）
（3）自然エネルギーからみた温暖化対策（橋本）
（4）日本企業の環境問題対応（細谷）
（5）環境事案に関する新聞各紙の論調比較（細谷）
（6）霞ケ浦と県内湖沼・河川・ダム（山根）

対象紙は、朝日、毎日、読売、日経新聞（以上全国紙）、茨城、常陽新聞（以上地元紙）の６紙。（全国紙で産経新聞<発行部数 20 万部・ABC 協会調べ>は対象外となっている）

参加者が新聞各面をモニターし、該当記事を選び、切り抜き、資料として完成させていくのだが、毎月、休刊日を除いても 29 日か 30 日分、各紙 36 ページ（含む：広告面）前後をチェックしなければならず、若干の無理があるようで、作業はやや遅れ気味です。今、作業手順を工夫して、何とか先へ進めようと努力中です。なんせ、当センターにとっても重要な情報発信機能の一部であり、「サスティナビリティ」が要求される事業なのですから。　　（ パートナー 細谷 浩 ）

研修グループ

霞ケ浦水環境教室に参画して

去る２月２０日と２８日の両日、平成２１年度茨城県市民活動支援事業「霞ケ浦水環境教室」がＮＰＯ法人茨城県環境カウンセラー協会主催で開催された。

霞ケ浦の水環境について考える場合、いろいろな切り口があると思いますが、今教室では霞ケ浦（西浦）の現在の水質を調べ、知って、それをどう改善（浄化）しているかを「水道水づくり」という視点から考えてみようという試みでした。

２部構成で、第１部は水道水の原水となる霞ケ浦の水（以下「原水」という）とその処理水である水道水の水質を調べ（におい、透視度、ＰＨ・ＣＯＤはパックテスト）現状を知り、第２部では①原水中の汚れを分解、凝集、沈殿させる実験、②砂ろ過実験、③浄化した水の水質検査（ＰＨ，硬度、残留塩素濃度いづれもパックテスト）の模擬体験をして、どう改善（浄化）しているかを知ることでした。

受講者は水についてある程度の知識を持っている大人の方々でしたが、透視度計の扱いに手間どったり、原水中の汚れを分解、凝集、沈殿させる場面では薬品の注入順序を前後させたり、とおおわらわでした。

それでも汚れがコロイド粒子（細かい泥）から緑色のフロックとなり、最後には沈殿池に見立てたバケツの底に静かに凝集、沈澱して行く様には「オー！」とか「ナルホド！」とか、感嘆の声があちこちからあがり、模擬体験のすばらしさを実感しているようでした。

私は今回の水環境教室には、所属団体の一員として参画しましたが、センターパートナーとして振り返ってみますと、センター研修室で実施されている児童、生徒への水質分析においても、分析結果を実感させる模擬体験を何かプラスワンさせればより研修効果が上がるのでは、と思ったしだいです。

末尾になりましたが、今霞ケ浦水環境教室開催にあたり多大なご支援をいただいた稲田、宮本両先生ならびにセンターに感謝申し上げ、私の感想とします。　　（ 研修グループ　浅野 明宏 ）

砂ろ過実験

教室風景

凝集、沈殿実験

流域内中学校科学部との環境学習

来年度から，霞ケ浦流域の小・中学校の児童・生徒や教員と共に本格的に霞ケ浦流域をフィールドとする探究的な学習を通して，霞ケ浦流域水質保全の意識の高揚を図るために体験型環境学習を考えております。そこで，土浦市立土浦第五中学校と牛久市立牛久第三中学校の両科学部と連携を図ることにしました。土浦第五中学校の科学部の生徒は，地元ということもあり，霞ケ浦の水質に大変興味をもち，当センターに来館することを楽しみにしています。牛久第三中学校の科学部の生徒は地元の牛久沼を中心にここ数年，研究課題「牛久の自然　過去・現在・未来，牛久沼の変遷を追う」として，

トンボ・植生・水質の研究を継続しています。土浦第五中学校の科学部の生徒とは，既に霞ケ浦の歴史や現状の学習，水質実験の基礎的なスキル獲得をねらった測定実験を行いました。さらに，霞ケ浦湖内で採取した水の中の小さな生き物の顕微鏡観察も実施しました。

今後は、さらに連携を密にして，体験型環境学習を充実させたものにしていきたいと思います。そして，これらの体験型環境学習の連携の成果を霞ケ浦流域の他の学校等に伝えるために，市の科学研究作品展への出展や当センターでの水環境フェスティバル等での発表会への参加も合わせて考えております。また，活動の様子を当センターのホームページ等で紹介していきたいとも思っております。

研修グループの皆様には，ご支援やご助言を頂き土浦第五中学校と牛久第三中学校の両科学部の生徒を支えていただけたらと思います。よろしくお願いします。　（文責　宮本直樹）

ご近所探訪（３）築三百年の富岡家住宅（県文化財）を訪ねる

当センターから北へ、おおつ野団地内を直進、国道３５４号に出て土浦方面へ左折、すぐに神立方向へ右折して６００米ほど。一般道からちょっと入った雑木林の切れ間に、この堂々とした古民家はひっそりと建っている。富岡家住宅（富岡良充さん所有。土浦市白鳥町）である。間口９．５間（１８．１m）奥行き９．７間（１８．４m）７７．５坪（２８３．６㎡）、茅葺一重寄棟造り。まずはボリウムのある大きな茅葺屋根に圧倒され、感動すら覚える。母屋中央にある唐破風の玄関は式台付で前に張り出しており、民家というよりはむしろ本陣建築を思わせる。その他、様々な様式の柱や、構造、まわりの意匠など、建築物としての特長はいろいろ挙げられるそうで、昭和４９年、茨城県指定有形文化財（建築物）に選定された県内でも貴重な古民家（土浦市教育委員会資料による）。

建築年代は、元禄末頃（１８世紀初頭）と推定されるそうで、そうなると単純計算しても三百年近い年月を経ていることになる。それは、敷地内の樹木の大きさ、古さを見ても、容易に想像できる。

当家によれば、前身は旧小田家の重臣で、天正１８年（１５９０）の土浦落城後、文禄元年（１５９２）から帰農したと伝えられ、元禄１５年（１７０２）前後からの位牌もそろっているそうだ。現在でも敷地の周囲に土塁を廻らせた痕跡があり、中世の豪族の屋形の趣すら残る。近世においては、代々名主を務め、土屋氏を初め歴代の藩主が領内巡検する際の休憩所にあてられ、奥の間には武者隠しも備えられていたという。

民俗学的にも、旧家として様々な行事を伝承し、屋内には歳神様や床の間様、竈神様などの多くの神々を祀って、季節ごとに祭祀を行い、また庭内にも氏神様、荒神様、三峰様、愛宕様など、七つの神々を祀って信仰している。（この年中行事を記録したビデオを、土浦市立博物館で見ることができる）

最近残念ながら、茅葺屋根の東側部分が老朽化のため崩壊してしまった。近くの部分も含め、約二千万円かけて修復する予定だそうだ。外側からでも十分にその概容を見ることができるので、修復前にぜひご一見を！。ただし、いつもにこにこと迎えてくれたご隠居さん（お祖母さん）の姿は、今はない。

（細谷）

３６０度

近頃は、年月がスピードを上げて去っていく。“おおらかなころ”の古きよき時代がよみがえる。土浦市内には、いたるところに大小の川がいくつも流れ、その水は澄んでいた。自然浄化されていたのだろう。霞ケ浦の水もきれいであった。どこの家にも井戸があり、水道はあまり普及していなかったと思う。このように自然の中に人間の生活がバランスよく組み込まれていたように思われる。

しかし、現在に目をむけてみると多くの人たちが住み、たくさんの水を使用し、汚れた水がそのまま排出され、水源地は消化不良をおこして自然浄化だけではパンクしてしまっている。水処理施設はあっても悲鳴をあげている。

良識のある方ならどうすればよいかお分かりいただけると思うが、人間がいて自然があるのではなく、自然の中に人間が生きていることを・・・。長い歴史の中でつくりあげられてきた自然界のものを人間が使用する場合、できるだけ元の状態に戻してから自然に帰すことを忘れないようにしたら少しは住みやすい環境ができると思う。

最近は、地球上を人間が支配したような思い上がりが、異常気象や竜巻等のしっぺ返しを地球から受けている。自然界の領域に人間が手をつけることは慎重であるべきで、自然界に対して謙虚になりたいものだ。　（内田晴之）

霞ケ浦５０年

私は昭和３０年代から４０年代にかけて子ども時代を過ごした。高度経済成長期だ。住所は霞ケ浦の近くだが、家から湖岸に行くには、子どもの足で一時間近くかかったから、子どもだけで湖岸に行くことはなかった。夏、戸崎湖岸が遊泳可能になると、１，２度連れて行ってもらえる程度で、霞ケ浦は地元の子どもといってもとても遠い夢のような存在だった。霞ケ浦に関して聞いたニュースはといえば、死んだ人が浮いていたとか、飛行場を作るのに埋め立てられるかもしれないという二つしか記憶にない。それほど地元の子どもにとって霞ケ浦は遠かった。

今地元の子どもにとって霞ケ浦はどうだろうか。やはり水辺へ足を運ぶことはあまりあるまい。正月に初日の出を見に行くくらいではあるまいか。それもないかもしれない。

霞ケ浦が大勢の人々によって色々な角度から研究されていることを知ったら、子どもの世界も大きく広がるだろう。いや、もう始まっているのかもしれないが。

（橋本恵美子）

ヨーロッパ紀行　フランス編その２

パリからモンサンミッシェルへは時速９０ｋｍで５時間余のバス旅でした。東京並みの車渋滞が？パリ市外から離れるにしたがい無くなり、車窓の風景は芸術・ファッションの国フランスから、農業国フランスへと変わっていきます。そしてモンサンミッシェルに近づくにつれて、車窓はイギリスやスペインなどの侵略を受け、何度も戦場となったことが窺えるひなびた片田舎ノルマンディー地方の風景へと変わっていきます。

遠くにモンサンミッシェルが望めるノルマンディー地方のレストランで名物の「特製オムレツ」を食べました。形はお皿一杯（直径２５cm 位）と大きいが、ふわふわで綿菓子を食べているようで、食感も評判ほどではありませんでした。

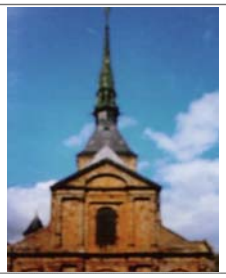
モンサンミッシェルとは「聖ミカエルの山」という意味だそうで、大修道院の鐘楼尖塔には羽を広げた黄金に輝く聖ミカエル像が確認できます。今では大修道院の周りを多くの建物が囲み。島全体がさながら城塞の様ですが、最初は島の北西部にある 150 ㎡位（私の目測で）の小礼拝堂が出発点だったそうです。このため島の中に入るとロマネスク様式の修道院、すらりと伸びたゴシック建造物、強固な城塞と古い町並みなど中世の面影がぎっしりとつまっています。

フランスも街中での飲物定番はワインで、下戸には割損になりました。

ある時は風景の美しさに、またある時は豪華絢爛の建物の中に古の想いを馳せたヨーロッパ９日間の旅も今日で終わり、パリ・ドゴール空港からフランクフルト経由で帰国の途についた。５回にわたるご愛読ありがとうございました。　　（浅野）

ノルマンディー地方の農家

モンサンミッシェル



修道院尖塔

島の商店街路地

モンサンミッシェル遠景

「パートナー情報誌　香澄」　原稿募集

「香澄」はパートナーの皆様と一緒に作る情報誌です。
常時原稿を募集しておりますので是非ご応募ください。
特にテーマは設けません。パートナー自身のプロフィールやセンターでの活動体験記、身の回りの話題、また俳句・川柳・写真など何でも結構です。
原稿は、センター２階パートナー室の“香澄メールボックス”にお入れください。

「編集後記」

７０戸ほどの集落の自治会長を押し付けられて丁度一年になります。最初は引継ぎ事項を忠実に実行しておりました。段々と用事が増え、今では週に５回は集落センターの鍵を開けます。細君は「やり過ぎだ」といいます。確かにこの用務はやらなければやらないで済み、特段自治会運営に支障をきたすわけではありません。しかしやろうとすると、やることはいくらでもあります。最近こんな声を聞きました。あまり精を出すと、次期のなり手が無くなる、と。そんなモンでしょうか。（H）